『リスクに背を向ける日本人』



著者：山岸俊男、メアリー・C・ブリントン著
出版社： 講談社現代新書
発行：2010 年 3 月10 日
価格：798 円

この本は、北海道大学大学院の社会心理学者の山岸俊男教授とハーバード大学社会学部長兼ライシャワー日本研究所教授のメアリー・C・ブリントン氏による対談集である。書名にも書かれている通り、日本人のリスク嫌いや若者の就職難について二人が対話形式で分析を行っている。

二人は日本の就職市場の現状を再就職支援、能力獲得への支援が整っていないのに、先に終身雇用制が終焉を迎えてしまったと捉え、そのため、リストラされたら人生が終わると萎縮する若者が大勢いると考えている。アメリカと日本は文化も違うが、それにしても日本人は会社というひとつの「場」にとらわれすぎてしまっているということである。二人は就職に苦しむ若者の現状を打破するために以下の４つの点を改善点として挙げている。

①法律や社会規範から企業をコントロールする、②社会の信頼感とウィークタイズ（感情ではない広く弱い結びつき）基盤を強化する③自分の考えを正確かつ有効に伝える能力を身に着ける④「場」に帰属しすぎない生き方を認める。

感情に重きをおく日本では、心を許せる友達や身内とのストロングタイズな関係が重視される。そういう関係の中では、自分の考えをきちんと相手に伝えることができなくても、自分を理解してもらえるため、コミュニケーション能力が育たず、最終的に自分の今所属する「場」に帰属しなければ生きていけなくなってしまうという悪循環に陥ってしまうのであろう。

このような二人の指摘は就職難という状況だけではなく、起業家の育成も困難にしていると思われる。失敗しても再起を狙うチャンスがほとんどないのであれば、企業という「場」を離れて新事業に乗り出すのはあまりにもリスクが大きすぎるのである。アメリカのやり方が日本でもそのまま当てはまるとは思わないが、日本でのリスクの大きさを軽減するような仕組みづくりは重要なのではないだろうか。

大阪商業大学 総合経営学部 経営学科 准教授
起業教育委員会 委員 坂手啓介